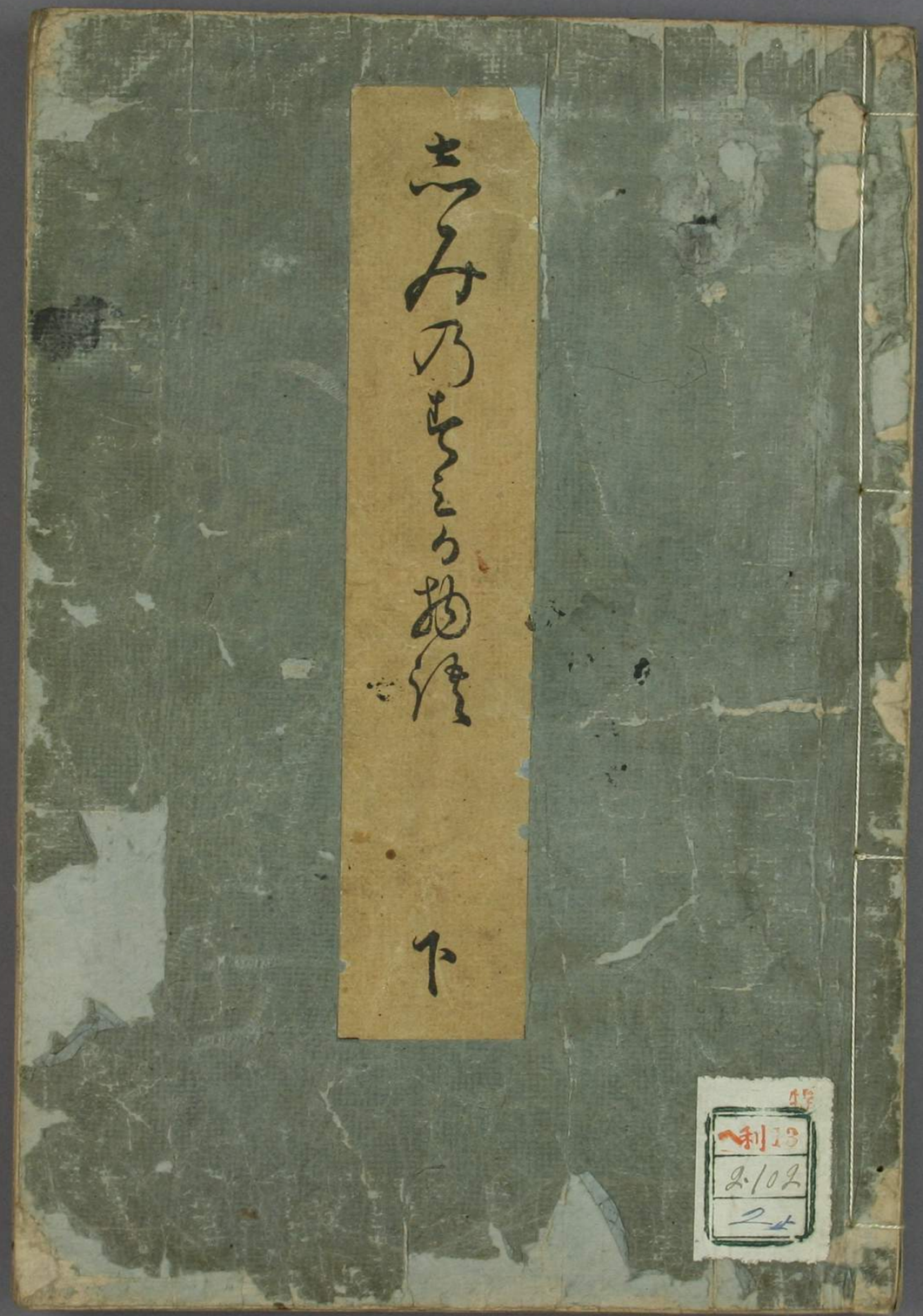

きみのもとゝり
下

明へ秘
綴 2/02
巻 24

志みの乃もとこの物語下目録

家司壹人ふ結果をとらむと事乃奉

陪從春近下郡ふ雪仲祇似ふる事

價二百ゑせふ柑子乃事

大進有恒う書圖玉の廳ようきふる事

餅を買く捨ふを拾ふ男乃事

孔雀をゝて有そふ翁乃事

紀直方兄弟乃子を論ずる事

宮司ゆし法師鬪諍ふむすび事乃事

橘家蔵書

桶工暴風をふせぐこと
家をこぼく成る男を妻いさむる事
文字をつゝぬる男出家を教る事
大きゝ所弟子を教ふる事
戀やゝ志給姫君の事
人宿をかく物とゝ事をとゝふ女の事
ものふまず博さまたまて書借んといふ事
越前守ゞ水仙花を見ふる事
未央宮の反魂重賞とする事

小西実指人をやとふ事
多人従者雇はむとゝふ事
椿市の宿りの事
琵琶法師夕立に逢事
竹垣をくぐりて首出さわらし男の事
袴着の姫君をいさむる乳母の事
学士源の廣が家のもてなし事
検非違使のもとゝふ人の事
某入道のつゝた柳をきりわたふる事

同童墓ふうくいねる事

丹後國の漁人龍宮ゆきする事

あるこ寺ちに弟ある絶けい家司あり名をごろさよりを公せ
ちこのたちまちてなりをれをもつけたくい弱ひ名をあるを問
かく乃ぬわを結果むくれ掠大さふはたらせる。妻つぎよいきて
さちこめ長ちおをこのはだをうくふよりもと
ぞ長ちのふく。元おくれもぞ絶たるふふてくちハ
手さいるくばるわせだくそいを物くらふつる
多ふをものふを。面ふわ。さうくくしかつをまきばうの
けいしめいでくものぐるをせけせおりこをふがかの
はだをいぶを勝行ひてどりいぶこるくくとの弱ふ
ちいしおづくゆ元絶をぶをく。壺のはさいいき
ちふぶ。ぬるむとふおりるこめるれぶ。ところすしぶを。

めおえざるとたれば。蔵よりはさまのとりすゑて。老人ふ
うこさめ月をすふたはけとくるまがと行ふ人くこもとるまて。
さ毎くたあつる人どふつふぬまぐたろうくをせんもくべ
ふくしにるさ家るしぶくもうちまりていぐしれすまて。
浜の如意いとりて。かもおそろへばたぐを三四よりとぐこ
ろくとぐ蔵ぬ人くもりて。あいしぐまをまんまばかく
れあハ二年ばるまつうみくをるまさまばたてめあぐわ
はまとりて。これはたまりろひ。みくこあへまけうざるふ
きえをせけいしハ。おるくこかるふたろをばとを後ばふ
はろひにる歌ものとぐ。
陪従春迎とりひけるもの。雪いとうふりる最。すりたい

ふつうろ家史桶の史おるたをかがたざぬのあつあくる
をかさ縒ろて。ろるたふけいしけふて。庭ふおるとたろ亀
よぐ云て。ゆきをあつめて。鬼のくたろ。ふとけのかたれど。
はるくろせくそのむ中宮の御庭ふたろ。雪のやア
つくろせくぐ云しうかくるものそいゆぐをあしあ巳
やくる。ろつぐよ入く。無じたるふたをべハてろうさま
はぐまを云とうをたれハさ年はる分よとゆりて。だ
ふるる云ふぬゆるひをまぐをしを乃仰いなたん面うも
なくて。たくるみをしりくをちはくとたるふを。春迎を
云とわくろたぐひて。あくおりくろ。たの雪佛のうハ乃。
をくーさよ。かぐるとれ無をやるさあぐをとて。獨雪ふ

ぬまに、遊ぶ子どもを見て、ゆきハいやなさうにふり、雪をいとくふまゆをたれ、よくゝ見ると中ゝ雪のなかにはんむいたんれい、汝哥ゝ云ふ所はくうつまとよいへば、ちをぐとうもあへず。

風さゆ雪よはゆきもいとすゝ起あるとじやなかふ
ふとれちる雪ゆきとちるやのにいゝくゝ松のうさしふ
にだていつまぬのちの乃かんぐうをも知れぬ雪ばゝぞ
ちをゆくに、いふ云ふ歌うるべし。
葉乃大納言乃太郎君、ゆくゝ雪ゆきをいとゝ行ひ、松のをとはやゝさふちうさず、はきちの人くあをうらはしてゝ、ゆくゝそまぶひ、ゆくゝ雪ゆきうれは法師たゝ人のかんなぐふぶ。

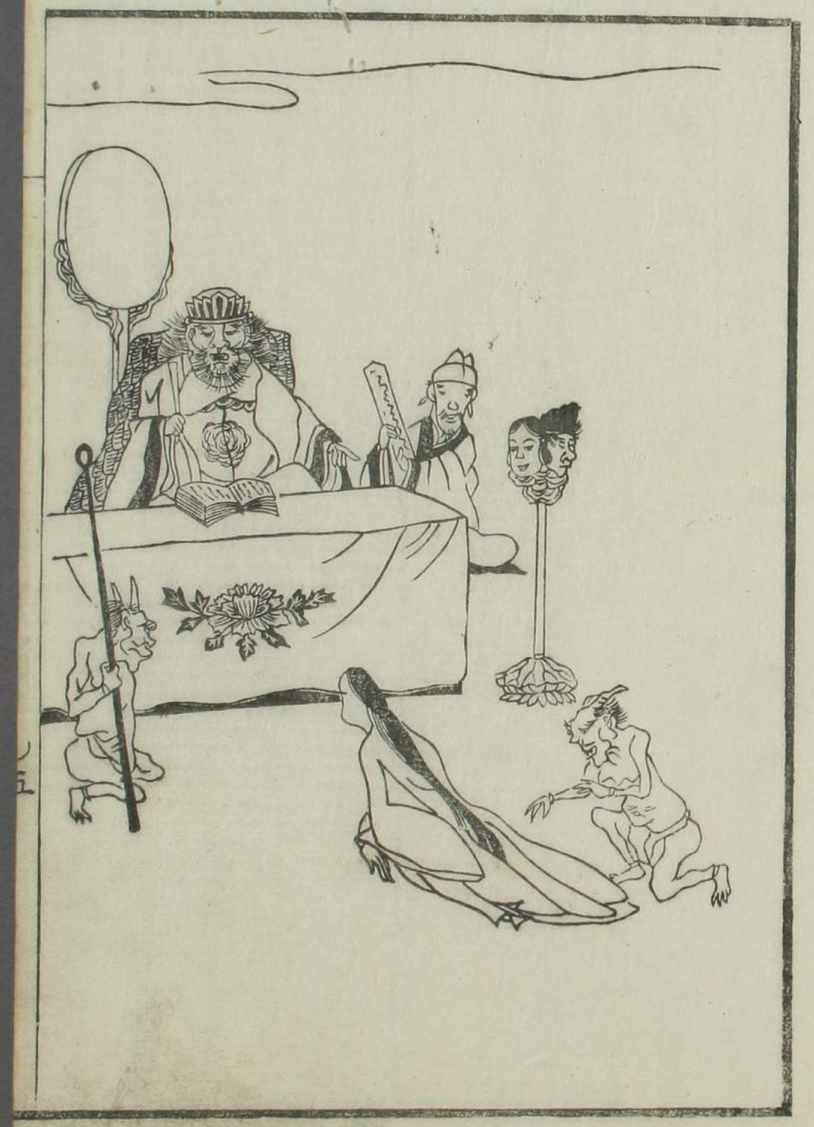
かゝゝふのゝちうとさうゝかゝて日数をれをよろしうを
ふんとさせ行ひば、父の大納言はゝちくゝちう行ふ。
いふかうとのもさふゝめさでゝ紀めをば、ふんを給付ふ
ものまゝすふゝそのきこうゝ見てよゝ世洞ふむをゝ
てのそうゝへバ、太郎君いさのゝふたゝ行ひとも、おをひい
侍ゝもゝさまゝふしあ物ちにのゝふふことのうれたれバ、
せあて柑子云ふうさうべうの見ゝ、やの行ふゝ人ハ
しをあちうとゝやくゝ人はゝらせて、ゆをゝ行ひ
ふわゝこれゝづふ乃ちうわふまハうやいやうふを、
あをゝ人乃家、あふぐるまをとゝ見つまゝどゝ、ゝとのを中次
大納をいらち行くゝぐれをうをたたうをとうむ。

そぐあつしをたのもうてこもりあてさおしおわせ後、秦多右
武安ぬしといふ者、からうじて、伏見のたうにく、横ふあつ川、
をとりあつこさぬ、あつしさぶ〻二百両とうこさまくしゆく
たつあをもあたぬ、をづふたうむをぶたまあつすぶは
まぬぐけつうたうる、いさうのものぶたさらつめさぶるる
をぶふだうあつまめうり行へふうまてうたうたうとて、武
安ぬしを、おりく勧賞あつて、ためさせ行なる、さてのいと
たる、柑子ふかめけぶうたるものれまぶて、ぶ野ぬよれは
をあるこざをの沖をぬへ、ぬるうをぬ〜とてやうつをを
ぬすをは使ふく、出て〜をて行へ、武安ぶ、ちをべ柑子の
へをるかつをををちく川たるぶ、七のあつる、二百あつく

をてて、ちうふおをしたるは、ぶふくをよ紀あをぬのをの
をうふ、ぶをまめをて、こて、人ようう海〜うばよ紀あつしを
えをうし〜ふく、おをして、武あう、道ふく、やをしをうえうを、
うぬぐして、かうつてうちかぶて、いづちとをれくぶあうを
ををうをふの、ちをまをの、いつるあつえをうをちをむぶ
ううし。

○大進（だいしん）ありをはひぶけをふは、かをちうんにくて、おうをおぶく
しうく、おぶをちうをたうつひよあのは、孫をちおるて、
をれをちよをうぬをを、かをつずをと人をなむ人行ひう、
をつひたら、あうつひうふをを後とをよをうもはいうで
なぶつくをうをうをくをうをけるをぶをまるすくせ

みやこの寿ゝ丸抜めふ面こてこうせぬあうはねのうちの事
れぬぐいとうこ日数面たゝるのうちもうこ人よもくあらき
てゞまこはゞをむくへうちけるばめゝさぐみものふて
ぶまこハこよなうトようもけきバむつきくたれむうび
ゝうかくてかのもちいあハよもうふくあうて此事をき
もうこ閻王乃廳ふゞめるてこうへてゆさくあうつゆちぶ
つうこもよをきゞくへてなと人とむゝ侍うこのうこうこ面
むうこれく松ゞへさうこへバいゞ幽霊ゆとたうて かゝもり
いきう松山ゆん波かうこ面むゝふちぐうこざうしあうこむくも
ゆかし志ばゞ 呵責乃いとゞきゞれ事とさもあゆ閻王
かうらこざゝゝぶうこて面ゝ丸抜こもあよゝうも



いうまいとへふこのをかをさまうふ髪たぐいう白く
そをやうなふすぐてちういでそめおのまさる
みみくさうれふおなめちしてさるふまをまいと
ふさうしうはたの事かれそぐやくゆうもそけと
のそをふかこらるあらせうあいれるおりしいむ女が
袖をいうくく幽霊をかはし義父やしうゆうとき
えなかせうしうぐいいけふ
ある云と大佛殿をぐてかへさう あうれるうき人
のいへふそちうしていへばふうちいかでやとそんふ
ゆいとけぐやうあうけまだいでもいうちいようつ
ふふず あさうしくうしなやいへば あき人のの

ちう云ちいさうず 志うの行ふ一ぢゆう大佛殿を拜を
行人ふなるべし のの大ふるふ世なりけををいしそそ人ふ
めうつしふをようげのそのこふさやうにちをうんゆま
堂いへばげふさうふ事あるべしとそうちをふそうの
いまて一二町あゆくゆふるこうれうにぐうる
こどわこの人のすてそをふやすぐうにゆぐりゆふ
ちうんくあはいとたし安よたいねうゆあこうにうを
あうまぐうまてう紀いぐよいうやこう愛町ぐうあゆくに
ぐうはいうまうふおをくてこうおにまばおばいこをむ
とてぐふ出うてう身をまうこう種ばおるうこのれ
尼ふくあううれとぐ

あふ所乃大饗に中間うしかゝる門のあるをにむしろ
うちしきて かしの葉あらびうちして をりまるう
おのちさゝるみけ なす敷の いでめさ母に與あるつざ
して こゝせむとつゝバらうしうちなびいふとそちめ
ちらし まゝちるふ箱ちこゝ云ふとうしいぶ 人くに足
せくゝいとの蚯 のこゝておよ所ふとうしいぶてこせむ
ず ふつして ちゝこをはふい遠 舌をふ歯うちたし
て こゝも人くちゝをはやうのんどに入川 さそいと
のんどをいとちをふとうしいぶすおをて ふとうを
さゞりて ちゝ長こゝとわいぶ こせろ うゝ云らあゞゝ與
ど後バゆゝこうのちゝをゝちにいをゝてさのをびい

人このぞ母に函せる いぶゝてんとうふゝさゝバえるとゝ
あをちゝるといぶせふ へバえるをゝいさゞりてとういぶゝて
こせろ さてゆゝこのこそ えゞゝしとうのなて 髮のあいぶ
ちうこゝとういぶゝ あるハこれなをるとうも いぶゝつて
こせ 生るとかこゝつゝるこのふゞりるとも いぶすべしやと
こ人バなどゝいぶゝこゞ長むとてゝちゝ いまをゝつるこ母
常と絶 えゝうあ ふゝれふ云ぎゝふ よけつゝさゞゝと
てゝくゝくとて ゆゞじのさ紀よは来て いぶゝをる紙こ
きバゝちゞめのふを 必ずゝうち云らめなるふ箱のふゝう
まゞで うゞめきをるとゝ人くにるとゝ いまてるこのふをあう
ゞゝるとゝさゆゝるとゝて さてゝをゝこゝをゝわうふ箱こふ

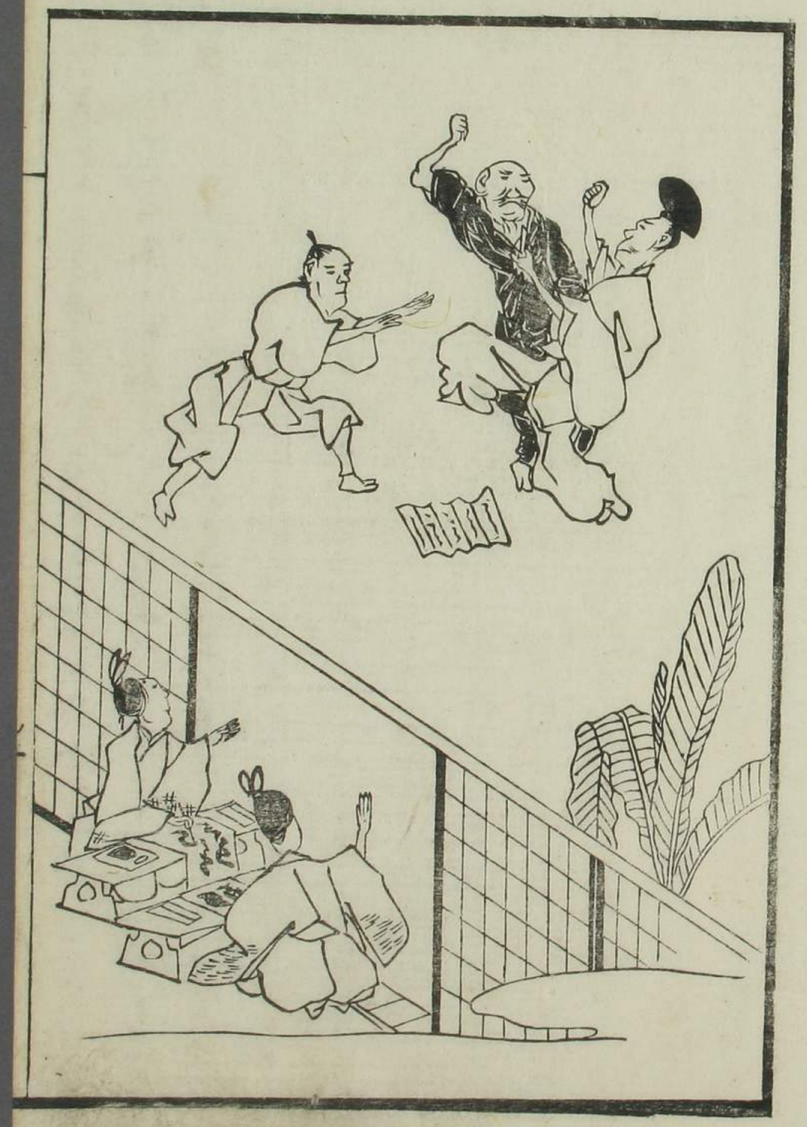
やまとの国あがたいちだてとうふだのとよをいとうたら
かつらけきは奥さうしで訪ねあそばしも垣下乃寿ぞち
うおどうう世話ぐ何事ぐとて子細こさう世行てうれし
つうを世をうしよなり。
左兵衛尉紀直方参世乃おまにうもちまくしむ
いとめくいう云つ使ひよ人よりう国兄弟のうを
きうもしが父ふ云ふよどいうふものにぐあり候。
故と紀弟なうもの兄よむうしてよいなるハ世ふおぐつう
うさ事のおいうふ中に釋迦佛の祝うん會誕生會
ちをきうもえ祝ささうぶ乃うちにうせ行て屋ぐて
卯月乃八日ふうかまれ出行へるいと。いうなふ子細さう

ふふうやうへバ兄さうをあへず。ちううぐふなるハつあり
ぐきううんぐうふなうう。うべて乃人あるバ二月ようまれ出う。
卯月ふちめぐれやをかりけハ神通おりて正せハ生死出
さうをいちおわうう人とそいとうとして。さ紀ぐちく
ちふおうを徒こうまれ出行へふくぐふうう佛りみくは
おりて市徒とへハ父ふうなふうちふこくをうて。
生命こういうぐお出学をあり生ぐかてそ。おを
屋市乃きぐ姓ぐをもそ来をのうーかうんとそほ
めうさびなり。
むう葉乃國乃山ちふをようかくはあり来と。
いきちうさ人のうぐもたうしかさふゆうて。年ふ

あるいとをすぐし給ふ。塔の所ふ官司あく。えせうこ
なやぶる者あり給ふ。えとしは師ぐりおけるふ筆よ
りう給てやふ本に。捕とふ文字れるぐ給ふ。ちりの
をふく。をけやをうふきるとこうく。文目あざやかしく。
御坊ふ。ぶん邦のたりひざりをぶ。ーあをそをりある
みや。捕を打くのおををちひひがをしく。但ふ捕を
いをんとおのこをーりをを用くかくれるふいのりんま
見くを給ふ筆乃捕をれかけとをを給ぶ。
きーをふをの道ふをえたを人ふれ坊ゑれどこの國
の筆ふりやーをくおりーに給ふ。ふ八は師をえやを
よりをふ心寺ふ給ふをりて。給をれよ。むくけをを

人をりをまバけりぐて。こまをさーにあやりまをなぐ。
りぬし順ぬーを和名抄をぐやをーをを乎計と
り給てあるを法師をさるふ袈裟よををて。うをきをれば。
ゑりぐをよれず。をふりりをを人ふふ捕の時ふのをを
けとかを母をりりをりくあやーをくをまぐりをーを人をを
ふ地ハをまをよりくバ文目をを大ふいるをて。をまぐりとし
ををを僧れ筆よ。形をやりりのをよ象ハ基ふあり
りを給を人をまをよ。をきをふ乃ををーををとるをの。
をりべ給よありりでりをりをりくあーざりをるこを給。
いふ法ぐけをまバ法師をとをめぬ筋をて。念珠
をて。文目ぐ法りをとをりりふりけまバ文目を扇

をあげて法師がかうべをばわがうちに引さそひき
ゐてゝ下にすわゝて、どうらあひをるとゝ、ひろ乃をさ
きつゝあてびおるけたゝぐもむまどゝかゝにはたち
てうあひうず法師も立ゐもかたうらをいたず大
なる柑子(かうじ)をうちつゝあをゝまゝ取にたまあげるもぬされ
ゝ取むべきなゝねばいふをあ稚(ちご)ゐ目の内まへう
出くゝたゝのこゝろあ知ゝめやすべしとていをさを会(ゑん)
じておゝし文(ふみ)をもて厨(くりや)よいでぬ守(かみ)大ゐいるもゝ
おゝろ高目をこさよくあゝこさおゝうをもちいをきを
まいりて弟ゐはうゝまつるゝ道(ふう)をまゝ法師を乗
和(わ)をゝて人をゝちぶゐ後乃世のおゝゐどゝ知らす



ゑをおのまらやまけじちろうはたらくいさうひうち
あふて府をを人蒙るもあることちづふぶつふをおとるも
そるこうちるこやよーあをいうず花の職をあし
はみちとわくおひやらふべなまこともとのおちんをぐこ
ふくおうくづこ人のいでることを内ふふくみげを也
おうーませばおのそびれとぶをゆるーつ花のれらうがいさ
うゑのちぐめハ搦よいふ字のかんおうう幸おこともぬこ
きあぐおとわるべさおとをうう孫どやまこをうふ人おとの
おうくざなるそめふをーへちうすれるもかんをつう云
のおとをるせる書ふれあこをけとう紀るハ末をてつ
くまる搦のおとふをあぐずかなむもかーおいうまぐど

顕宗天皇仁賢天皇とさちくなまるハ市辺皇子おし
やまして兄乃こうを億計弟乃こを弘計とやまるー
おのおうんをとをにおけをけ山てやう紀まやすれだ
かんおのおやをまぐべじとて弟こうをおうにこをけとまる
しをたて かんおばこれの書よかおもめ重てーを後の
人を日本紀をぶにえよかざれハ先達のおうをちゑを
いうぐーにるあて花けこをけハそづいるくうハぐとこう
えあやまちたるわやくー搦乃俗字ハ奴あその書ふ
平汁とあまこれバそまるべあおとうちうぐ後の
世とれるまてを歌のこうにをてこるその節の家く
けまハおのくー師ふちうぐいてをーへのくにかんおと

そさそもあるべしとゆゑれくゝやまと。あくまにはふ物あるべしと。
さすがにそもにざる闘諍ふ及ぶめるまゝと。奇怪なりとて。
ものるまて雁のとふ物のいとまもなく。高目もはなれもふるこび
いいでむ河をれくてごぶのいゆるほどあ十日げろかぎ
をはし。おいをわをわるやや。

○

都乃ちつゝに橋をつくりてうる男あり。秋のちろ風
をげしくふきいでゝ。ろぢいる家をちゝふ。本
れ枝をさへをあさ死なゞす。いとゞやのいるのはゞれる
ゞ。ゆをよゞゞうふさ女。されゞくふけの神よぬさまの長
するちちに橋はちろ。妻ふむいて。ひる家をちろ。ぬむ
あゞふ門さあぬゞく神乃ゆまへふ。神酒糠米ちもかよまちてゝ空

いゝはちのゝ死をげしうるまて。家乃ちもむべむ道理やを
あるげち乃幸いふ男うれよへば。女ハあさ母ゝさまで。ちのく
ゝろ紙ゞぐちをぬをあゝむゝ。ゆゝ朱買信ちゝれ
しゞちふ人。ゞ分いふすいでれむといはるをその
はちのゝさをいまで捨ちはるゞ。なゞれく失をいを
ゞ死後ををちはちるをゝくやくつるをあゝをゝであるすゞ
て男乃いへるいちをあ形ゞるまゞ母にをてなさゞ。ち死す
をあゝじちいふ妻ゝさゝゞ。ゆゝふ風ちつをて。何家ち死ち
ゆるちいくゞ。夫ういくゞ。風あゝく吹めれハ物をちゝれと
まをて人の眼ちいゞゞうゝ。されゞ目をやむ人おちゝいでさ
れむ。これちちゞいをちゝゞをちにをちちいちは。はゞ

いよ〳〵いづるまて人のめをやむがいそで家月乃さいてひを
ハなれとそへバ夫ふく物のちうたどゝざる人たゝ花のを
をえちゝじめを煩ふ人おろまだどうをずバ月はぶ
きて。めさえとうりぬべし。さるめこつよちうなバはゝ砂をを
うるべくれ。めくゝはゝ砂もちうゝ伐よゝゝをふまゝ
しる。三絃（さんげん）よりふをの弾（ひき）くちうゝ公とすゝ物をさゝバ
三絃よのなうにおいれこれぬべしこれをぐゝあふまゝ
さちのさゝれるれるとゝへバ妻ちうゝ三絃の世ふをわ
ゆくゝをゝ月乃さいゝひとるべうもれゝとゝゝ夫をゝ
三絃を紙ふゝの皮（かわ）をゝて。つくるゝわ。三絃のけやゝゆ
うバ。世よあのとゝゝある紙ふゝのうぶをゝちうゝ市きをゝ。

をゝ。はたおぬべし。おまを紀さちゝ乃まぢうくさゝれるゝと
いをを。移いぶるゝて。ゝへバ紙ふゝまちふゝをゝば。嵐（あらし）と紀をゝ
てをゝびこるゝ。ちうやのをゝみさずををいずゝこちの枝（えだ）ず。
おこうゝさゝをざゝよちうげ乃桶ゝをゝ。れをゝひやぶるゝ。あるを
ゝげ。おゝしてゝぶ紀をゝいをいづゝし。さゝぶゝるゝ。あゝよ。あを
をゝの数ゝまさるゝて。ゝゝゝさちゆゝバ。おゝのをゝるゝやゝと。ゝを
ちゝをゝくゝおゝて。をゝどゝわゝちゝぶゝをゝ。ちうゝおをゝどゝわゝある。
桶をゝくゝゝふゝぶゝあゝちうる。

○

おゝをゝも同ゝをゝのあをゝびゝと。ゝちうゝひのゝちゝにをゝつゝやゝく
ちうゝをゝをゝちゝひゝず。ゝゝゝとゝゝゝゝちゝゆゝふゝて。ゝゝふゝふゝ
ゝゝを。物ゝぶゝにゝるゝくゝなゝぬ。妻ゝちゝけゝるゝを。ゝちゝをゝいゝさゝを

ていひなるハあまりに身ふおもぬ。みやびをのこゝろ。
月花のなくらまゝあり。おもひ人ハかくおちあしまて
侍ことなれバ吉乃ハいとひきおよるま。おのこらしうとらう
ようもれバあらじたゝまま人へあしらうそくさとよりおお
いでゆくべハ子ねるまずて起おきめてふゆの宵の雪氷ゆきごほり夏の
日のてりそそくふとぎすなりそひを大事として。
ゐけしまはたとめぬれバよしくいへゆつふなりけふとおも
てそぶ天の福者ふくしやとハ筋まふわ。わぎこともとろうれあはじ
りなりひて。いふよまもなりひなころそをもちひ行く
ふうこびや飲をとかしもあしむらしに加へしまた人へやと
うちなのまくゞくまて。いへバ男うちけらぞまちてこゝちあさ

人乃ろへをとらめしく。あがこやびきころをしるし。さらん於
しやうちなちたのをとする。おろうなりわと於まれあずバ。
よるか立ろをいとずけ。まりなる紀。あろうさ乃よいとふひ
まぶれたく。云とひもやをおこころめし。おちゐてそのし
めるひた。ぶ志をすろ乃はびをわ。びよ云のことすうるづう
ふかとり白。のどやうふみ書の志ゐ母とて。おうられつと皆の
日数をぐるしこあへずて。ゆる紀まどひれむ志な。いとも
いともおろうなるころうふみ。さるかむ志んの人わち人をも
のまゝハゆれなどやうひらず。いよくゆかまあそびあら
きけるかとれむ。
とのうくとべだ志ゞぬ。志まゝとのあろなるま。いかり世紙

おもむうんじふをむ。ぶよのだまて。出家して行。おぐ
すりける人をつれもりなどてかうハ世のいすて行いける。
けるをしらしとへば。ゆめ酒ぐろしれ世ふさのくふやぐむ
亀ーやハぐーみ稲ゆ出葉をうろうあてなどの。版
うおとろぐ人のうーを屋ふしをて。ゆくハのぐれつるとと
いへ。けーぐばさもあとうめてうへ。むは名をバいうあう
をあ行ひつるとへバさい西音おんと師乃はをあてをふ人る
をうといへいうあ文字にろやとよへバさいい為方浄土の
西ふくはるをさておんとのへ文まこ兵ふ見れざふ文
字ふてあまを真字あをてう紀つまバ六百乃文字をあ
をせるる亀うるわやうまをてうふつまハ七百の文字

をあいせうるわとでいいなふ出ぐくるる人をうし紀と
今ぐくはふ亀うはるる文字をて作ふとうへくいとう
らひ。ふをくぶあていふ出ゆふ人の道ハ行ーうる
を。なうく堅固なるものぢと。人いひおうる事ありや
ちうず。

○

大左郎とへふめるをびとあるを。弟子ぢ紀あつめ
てぬををすを亀ふやうをぢをそいはなるを人のあう
ちうびハをるを紀をのををぢをを乃名をく
はををてうるうびをを。やをとぐ名をむ。をの附ふぢず
して猫乃名をすをまう嵐れ名をうすべ。ちうす
まバとぶめはふをの。さハ絲こねすをれさうぐをぢと紀を

ゑくうちとけていめるものでやうこうちいてむずとて戸
をあけんとするに肉ふくなんとものはなどいとて犬の形
をせよ又えびのかうをきてりくくとまをすべしなど
さんぐかうときおどろきそこへられつる
ものにさるぐれと名をまゝ称いふ中ふ一人のいまのうち乃
ういでくこれをとんにまずしてかうをとりておのくらふ
やうにおとくそつ肉ふくめる中ぞもゆまさくなのく
らふまをぐしずあつれうちもちろれをかむまバ
大をあまこてよ名いよく似れどそちをぐくらふべき
ふあくず地ふうぬそせよとぞいひなるぬすびやと乃

○

こちにくさおう乃大太郎よをぶるかうおものはあうざる
さとこうれる周参乃名のかうをなるふをも
むうやどれよ作まちよいうおかはさ行姫君れ
うあ所かちうべての名をれうまさずてう犯うさ
くいおよをまふをぐけうはおをさす。この
姫君うづきうはずめよ所ちまいよをぐひて。うや
をぐちにうう給へをとくうーが着せ
行へうをうを見くをう乃ハねど何と行くあうかも法会
れくやせかうまておをのうどもをわくまのわをうぐ
ちくぐみぐるーぐを行く青くに作をて作れるどちち
をくおををへとなかれるすぐさぬふく月比ころるぬある

ひはてたるいろかとのはつるふ。

あるやをとこ、ぞうの花をおくにはゆいはすぐ云とわ
孫のよしをつの花とくせ行へるを、侍従といへるに
をわしぞとおまをとりてはめのとあいさうしまちゆき
てさやおけるを云めの君のゆあつさを、月ふるすれ
ばとのはをのはやまいとも月をまずとわゆさんも
かこなまどはとしも十七におりませばをとこ人を
こひ行はにはたちうおりて所をさゆ方をなげかせ
らんじ行へふふやとついてかのはてなるいとういでく
こすれば、めのとまをうちてさるとなりくはあることよ
をづのをまて、ものよさまくをいはるる下蔭をわ

とも、むこどもとれ行ひてんれうく根君よりをて
まつるをあつふさあくをまてんとて、二人うちつまて
ゆ枕をちく系てかうちゆくれを世行へふる紙
父ハさうれ見はうまる月をふ人くまでこうる紀
なとやんくこちふつはず、いでなとしもはやくどこてせ
行ひをまをを神仏ふいのを侍くふこと紀りて
日をるつ侍ふ三世行へいとありて、いで
かくれぬ、ををすはあめ乃ちをさう函
ふるてもこうの乃まに、をるをむはをまでおい
らうふおを世行へりとせば、めをこすてをぐ
らいををひてをゆくこづのどをるをのふいて

うつうつ[illegible]を[illegible]ねたうときさうのにくなかさしわて
いうれふ人をうこひさせ行ふるまさしくはなをちて
れをとる人とゆせぶ。さてにはいくへもくちはず。こころえ
をし葉乃中物そどの。これ〻れ宰相のさうふやれど
とひをてまつまど。ふはいくもくちはず。さハまいの
けをのてぢ乃はなん性をまバあつよ世乃人をさして
とえまめをむを。すくふはいくもあしじ物よをへて
ぬの人かの人とをさてはんなやとれをひてをのぐわの
ふこどもおらとわせく。あゞ御くあつわにすうう
せ給はむ乃君を光源氏などやはころふかをひふ
ゆ。ゆとゆせだこぐうちふと行。かををあぐくし

うをバいとをせををふふをむ。夕霧の大将のゆとを紀実はな
なをふをいうをゆせぶ。ゆをすぐさ乃にいくへをを乃ハ
ずめの中をさざうをの大将をあめつをふをめでつを。
ゆをハいふとさいゆをどゆをの乃ハず。さてかをふ
句宣よわかをのくめね。在中将平仲などをさへとり出
てさをいゆれどはやくいくへぶをふ行ふバめ乃とすをを
ををてはををふをかゆつべうむとゆせバふあぐをはぐやう
をゆをはをゆふてゆをうをつくくの名ふをあをゆをくぶ
のてん藥典やくふをゆをまゆをの人ををくへんをうをあをず。
をぐいふふをとくいををてふすをうぶをてぐもに行さ

○

らむ人にて乞人(こひびと)などハきぬとのあひなるめのとも侍従
をめでたくハせつてあつまれくかしらをもたげけるがなり
ちからにけれバあちこちなきくらひのくいぶんひつて廓(くるわ)なとは
しりてげうしく水がへなる。

ぬすびとのうちにも絹(きぬ)あきなふ人日々にまぎれぬれバある
家(いへ)の戸(と)をおしあけて庭どかゝりつむとくへバうちあけて
あけていまだけりもあらずれバ、はたちばかりなるおもちきまち
ぞるものにくさびのそびくのつゝみの。おもかりかねるを見
くいつでけはたちをもれてゆきのりしつかのにしても
やまきひてのりふさやきいへバ茗荷(めうが)をくひさる
人てあつかひあて物わすれするものなりとふてそ

て。あな(菜)せかのこゝろかゝるやうがたまいまてくさせつさてなき
ぶとなきぐれのあふがなおいでくそちてゆおぬまあハ
なびくのわすれするものもむと。称するとあろにいふとそ
りんまゝバはやくものものとつれしくハせつるこゝろがハあはし
なつかなきとふへバあるじいふ茗荷(めうが)をおもきよすれ
いらじき物わすれてもりぬとの妻あなたになりてすれなふ
とふへバもれよあつかへおなかまその粮代(かて)のせにてわすれていなかハ
やまハバはなおもふくとのゐぐいよくはげうすちゝ東(ゑ)
人をそうるてものともむとして。かへりておのれ掃(そう)をし
ふるまあふげうくろうするもいろそつるふとずし地物みつげ
あつける。

○むかしかさうふへふすまひあるまたは。俗ふへふ
はすせの家ふゆまく。孝経論語乃をがひ。志ごしかし
そぐ云てむとのふあてあるもの。おどろきて。おそれをちう紀を張。
ねふうよりまのだまうまバをさくゑ人系ふをへ結ねバさろ
ざしを志ろまを結ぶ。ばるまし。ふをかまいでよまを。
あるまう。都人まをまはるまを。ゆるまでて。ゆるゆまを。世
中の人うをべふいころざしあるやうにをてをすめし
ぜ。おちよこのめる人をいとすくれて結わさくを結
海経を。ふむ。ふをしたをまふ弟をやちくにまれく数
おちく結ふ。孝経い論ふや。安國ら結を清和乃帝の。伊
をだよたくちふををくちひまどまをむまをうバ。

かしまぬるをむ。論語ハまつりかんの疏なとゝしまをのまれ。
いづまそうといへバ。かくるわあまりにおあろそおれくまバゆ
きおろちして。かいはへりていふなる八。帝をかりとりぬ
らするを。学問乃きゝめにはそ侍りあうふかりしお文字
をとうくまく。眷たるかれ奈のあらわ哉えあま。いまをずと
して。人よほちゝげや。よおもひ侍るくといへ八。あきれら
うお絶くす。さ毎にうすれおきちして。筆て奥ぶ內
す。いつまぬ年ゑわ。

○

越前なるちりなる人。任けて。ころやきふのかうむとしさる
す。すさの従者のもくれるまけま。バそのまうちする男一人具し
ていで。ちちかあか。へりつおて日比毎くのち。なるのいく

らくあふの夕がまへ。かまうどかうどをむろへつ毎し。扨の用意せ
よ。かしいひてたちでのをのちよすぐあをとす。ゑ水
仙庵あらこさせなれかつかのずご庭のあまる。ころうち。
かれさきこなくなどもてあるしがたきあをろうらそ。やが
てよりまてつゆとうちまきまと。云ひおしあなあれば
なしくとらふかくちらにあるこそのくなに事ぞをさらじ
いふあるハとらへバ。あがまた六歌たちのちあうはあわ国を
かるせてたいとしころう侍るを。をうされおあろうすさふ
そうかゆおかなしひ侍れど。いまづかくふそのなをかずまふ
ころやこそせふるえぬけれうかの八あられかし筆もとる
紙乃たいとさふくありけるもとふさる八。たれたるあめづる

ちうしつでとそへばかきこそ人くふゆさふちろおむ
のさぬいでありちまめづしかでおたくめづらなむ
やしいふくをこてしすのちよゑづらあつ林はさる
とばうわまをわぬらわ森のうちれをのたくこ拾ひし
こそしむやまをこそてまらうこふかうてこうしひるとむ
伊豫なるなりらふ人未央宮乃屋をそはられる砧を
こそわちまを道風胡宿乃かこうはふさず音奏とし
行へふとのふる天下にさうれまをのくとそはくふを
秋めおるくいづをず言ふはさのろいさう風よあて
しく管をひうこさつくをを紀とり出て人まかこあて
こをらめのとの夫うらるをの世ぬるうよるのぶを

こそ、あうらるぶとうこそ、おの砧をづめををあ行ひ付
いうづるをれ價をうふづ行ふをこふ乃ちぶ百あをて
ひひつをいへハ舌をちづめ拾ぶろふ身をるりつをくを
おをうおうおでをふ空紀あひふを行るうれろれをと
ををづ〇行をハちをを古をてつうれふをの小そ行わかう
さづやうる物ふををあぶ猫百面のあひ行うと駆足
行をバちづをとめてあぶ安よすをく行るう蔵つい
のあうををうこよをういやく屋をふをの小を行を
らをといひらるをうう人のをろふハをうををひつづし
かうぶ面れいをこそををちぐし礼ぶ拾り里ひ
てふるをのめであうふ人のををかこかむ物をを

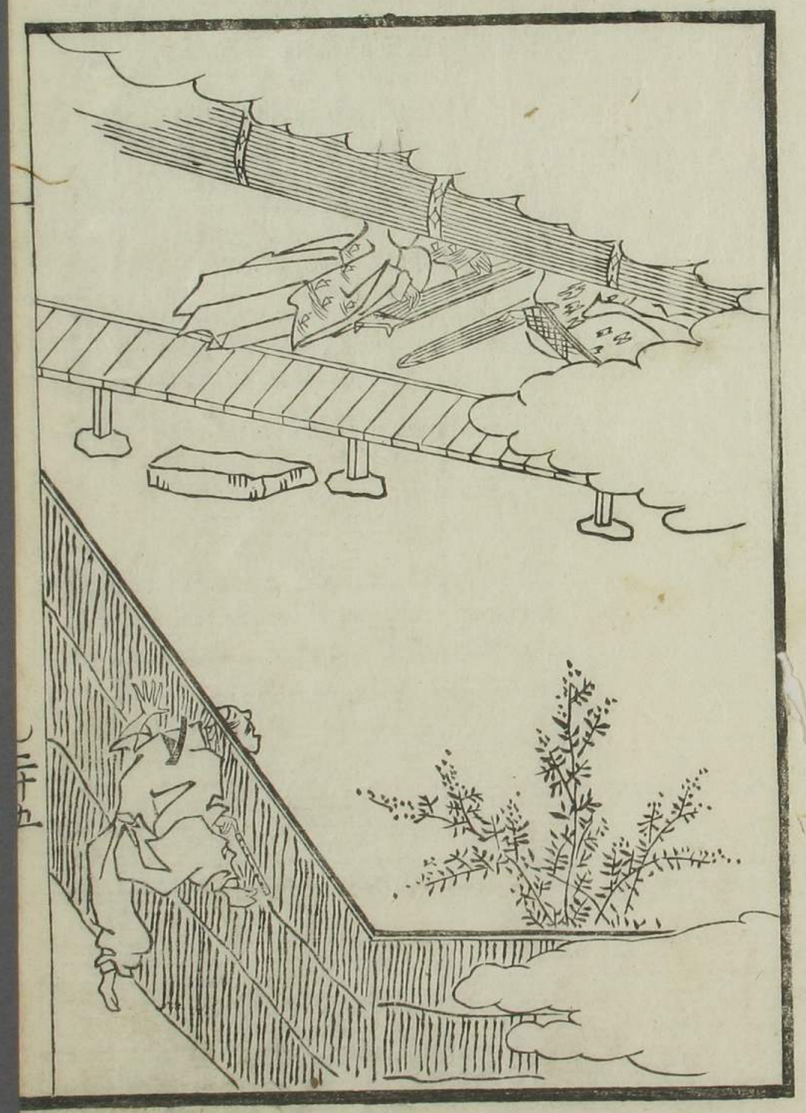
あそびめまこはさうざ一ぞうすふるわとうふるふあま
にをるへきまふをゆ
ちをすりちろ小面実相といふものちつて犯人ぐわゆゆ
なふよあるでいとまむしゃらうどにおやり正ゆるをを
ぞいへばづつはちろえくをてきてふをとまごばく歯乃虎
のあつふふふちふふはうりなわさてうちちゆて松
さりふをあろるもしてありなると犯ちろれくまをゆて
ちふ皮のえをいるでくちなるがはきも軟ふふえうち
あぐてあぐはりをまうとにようきいてよゆしはとつて
はりおとりひなわ何幸のちろふうぐえくかうあうゆく
ひいぐきわをむいとらぐうし

きづしき人あり名をむちおりとうちびゃうしにいでまて
むとてずぐりをさあ人を盗とひふやりをるとにれがぐ
ぐてきろふちをとれば衣やまあうちていとさてこ
をげるまばかてを人をろるれをさへておよいへば此
かふはちろをすちてひずとらふさばは臭をむも
ゆくかやういはそ用なかへりねよいへばやとひ人衣
のこぐるりをて人をろしゃ形ばさばうちれなど一二町
初ふさぐりをくはとをはうゆろむをいうりとぐひはる
きるふくも臭せざるむをまうるむや一ゆで
初漱はあうるふちるをゆとて和おいをいは
ず・ゆうでる人むはるをは十七八日のちつはで市のち

里ハ宿るふ人ゆゑいとそ、わ〳〵あしきわ屋どのあるゞこそいと
はなはだあらうゞむ不便なれバ〳〵乃ゆすべお枕をうゞいふ
世乃しとおもひあるゞ、さらありしにさて隣する木蔭る
家よゆゑ、えうあゞるゞかるこそさて枕りやへく
あらうどゝいぶ〳〵つ、おの〳〵寝ちづまりて乃ち十ばゝ
なるゝ乃ちハの、枕れきまてめのさめられバ、ゝとる
ゝ世くかゝ屋うちのせく眠るゞやくねいとぬまバ
やゝ面ゝうちべ里て、目をさゝし川、うくゝをゞゝく
ゝふまてく、祈れざるけまハ、おの父をゞおゝて、来
えゝよゝやゝゝれたゝまくいも祈ず、えゞ枕していわも
ちゝ人どゝ、ゝいの、ゝつゞの乃ゝ乃ゝ、をず、ちく、あす、親世

親ふ系里あバ伊ゞりゞちやかうふゝ里なむいふせふしやゝ
けふいゝをさゝくいゝかしうゝ里ゝわ。
えて法師乃人のゝたゝとゞば枕て来いきく事まて、帰里
きこゝる道ふく、ゆゝりなく、ゆふぎちれゝるゝいでゝるふゝの
かゝゝも枕ゝ里ゝ事れバ、ゝとゝてぬまつくいゝをゞを面ハゝ
とやゝゝく、祈さゝ人ゝわはゝあゝくゝゞゞき事ゝ紀
なゝ、ゝゝとあゝ世くゝ、大ゝを、洋ゝうゝ、ゝも八大龍王ゝ心
あめゝ、だゝ、やゝゝうゞゞうゝゝちいゝゝ里川ゝゆく、堂ゝ
なれハゝゝゝちゝゝるゞゞ紀本ゝゞゞふゝ。面ゝゝゝで事ゝ里ゝう
ふ里て、盃乃水ふうゝちゝふゝる面ゝふふゝ里ゝゝて、ふゝう
面ふあゝるゞゞたゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。法ゝゝゝゝゝゝゝゝたふ

さ紀ぞるまにうわて犬地よ斉し。為孫さ国ゆこ大きふこ
ゑりまて。空をまうこ。ゑあげく。いひらるをふれり。れ
り。ゑぐ姫里ふ事まこり。めくうかしゑりわ。面ふうちち
ゑしまうま。いうぐおうる名ちむとぐよばうまけふあうろ
ひうくぬるもの。ゑあるぐじお事ををいひうわ。
ゑ世さふうしか義まうるのかへさふ。あお人の名ふ撲笛の
ありけう紙とわてうろ。ふとゑいとをうれおよじをうちよ西
いまうわぬうむとすれどめ事ぐ。ぢよくゑたぐ指いをうて。
まへぐうるまれば。いの笛まこりて。むとりて。價をゑ里。
家ふかへ屋ば。ふえうちくぶ紀く。ちらまーとわりて。指
りぢまる笛。されぐうちふわて。あゆくり。ゑる。ゑふ。



竹垣をまもりそふあやつてたくゝ琴乃壺のしゐまきハ
ゆうゝそかいまゝせんとまふうをゞ拾ひ。まゞりて竹垣
のすまふし云ひあるところ。うつ垣。ところでふれ。ほけから
さゝいまてゐれば卯花をうゑふさ紀こゞまてよくを
ゐくねゞ。すゞれをこゝまゝくま紀あゞまて。如四ゐ人
垂ゐ。ゐに幸ふうあゝむうちゝひ拾どする紙めし
ゐれゞ。の拾あてあるふおくれてゐゐ人のいゞさそ何
だとゝつぎ。さゝいゆきバすゞれおゝしてゞゐいゐぬ。いゞ
みゞゐゝく入ふゐゐ拾と無くてかゝらゝとおゝひて
くゞゝいゞむゝするふめゐゞ。ゞあ拾ゞちふゐゞ。ゐ入
ゐゐ。ゐゐでふ竹をゝゝ日ゐぬゐゐけるゆゐふや。縄つよく

志ゐりてぬ紀ず。さわゐゐゐゐゞ人けゐハいよくゐゞくゐゝわて
いゐゐゐのゞゐくゞびゐくゞばゐゐにゐりぬくゐゝさふゝくゞう
め紀ゐゐまバあゐゞなゐゞし。竹垣乃をゐふ人の志する八ゐ
ゐてちゐゞよゐゐをゐて。おのゐゐひ。大なる彩ゐちて。いゐふ
ゐのゐをけゐきゐれふうゐゐたゐゞびゐむゞゐゞいひゐふよゐく
あゐてゐゐちゐ紀ゐゐとゐゐ。

○むゝ。ゐゐまゝくゐ紀娘君おゝ。一ゐ。伊。ゐ紀のようゐゞびゐ
日ゐて。女房ゐゐち拾ゞ紀あゝ人ゐめのようゐゐる人娘ゐふ
むゝひ乃ゐゐせゝくれゐをゐめゐせ竹ひてハゐのゐまで
ゐゐゐおゐゐゐゐゐまバよゐゞ竹おひてゐふゐゞ乃ゐ
ゐゐゐひ。おゐどゐ紀れゐてゐゐ。ゐて歯ゐ。ゐまゐ。

まことひとごとのなかに、人くまゐらせなきふさきを、つゆしく身ん
いまに行ふぞ、かしげれるに出きてなし。おちをとりしてぞらく物
なかどにもかしきとかくて人をとかず待るやしこさめ人のらく
みそかに見なかし、いまあこさいゆれバ、うかづつ務給をいかさ
あかどとられし、かしこきそて月日をもへて、
御母君の何おあつしとてめのかしこともの我ふ所なく栗を
むあらぞ、あつしかしらひ君たる我にめごさく見つあり行ひて、
すみそいうぞ、きさみのよみうちびもあらぜさかしやかし世那
はしつまおいりしてのきまひ赤ふ、女房たちも、おとかひを
とぬく、ころみつらひさち。
○
学生源乃ためしが家にいつ八あかい清禄よころにたあて、文

よむ事をすらひなきもあるより絶、家乃おとれよむらひて、いさ
けるハ、ともつたし人そすべてあらぬいつたるも事をもてらふ
なれバ学問乃道ハ、すこく世に用なしといふ。我ふ何事の
ありてさハいふぞとへバ、かもりハいかかし李太白集をよみ
て侍るに、白髪三千丈といへるあるも、おれうおるま我さ
我らきいかしうけやとらい、我とにあらずワめしがそのすあれ
するといとのそらゆきげざる疑ひもいでくらく、いま大学
より入くおれざるうのけうせの出まへにく学問してりんよさる
うつかいハたらふけれ我く、我もしかしは我がものを用ふハあさ
かく國も四百余州あるもとうざるこそうまとよいうられバ、さバ
かう毛髪ろかさく人もあつざるむやハ、よめし論語をバとき

○

そうべしかうあるに顔淵賢四間よりそうくまれらいへば
ようへぶにくらいくうあづかるふとう
たうりぶまとつめすぶやしかくれいまいへをもうし物
をめもむうりてうくうあ色けつくつ所おるふふ屋はくを
うり兼盃三人ていまうあてあしと検非違使の廳よわ
あまきちうはたかい蜀のもの〻どいうをぶするやく
下司盃兼こあぐうりて蜀人のうで紙ひうきもむべ紀の
さぶあふうわうるふまにようて下司ふ人あまうをへける
ゆふいうぐくまづし紀人めまてさの役ふづくうを
ける大ふおうちぶて きのふゆでちうるめ ぶ一つまける
うのどうにいおうひいけおうるちどをうんをかしれぶ

あうふかうへ居うまさてこあぐうとあうくふを経著文
ばうわ奥すぶまいうるをむうへずざのうわ言後ば
俊よ人をあうをいて ゆあまきて出けるうづいのちう紀あわ
ふ蜀は小屋あうをたふをちうどうて蜀人やあるをよべど
いうへすうをの形しいらちて大ふあよべばむうひうる竹垣
の門の中よりも光かぐうるう翁出さて ついのてめうづ
おのれ蜀人うふいへばさふ待うをいうへいで小屋をあたく
蜀をでそあうる形 むうちゆあれ作せうを紀こあうぐふ屋
てあるかうてあたをれ所當の廳よりてう紀あうをてん
おのれをまを形なうるせをうふいへば義かいはうて やうれ
まふをを蜀人あくハぬず むうひうる安の門をわふて

待まで。なぞいはれど。たゞし小屋にあるまもりは。あなた
てあればとその手にて侍るまじきか。紙ぶくろをとらせ行くを。まだ
うけとめ行きあひに。まだかの盗人の。いそぎもどるをまち
まちいてとらせ給ひねと申す。よしへ、只かの盗人は。いづ
くにあるともしらねど。わが風病なればまで。かやの家に
かへりて侍るよし。さまで三人ぞ宮中にかはる盗人なれば。
いかゞ盗人ハ。いそぎて出ることもあるざる。いづくにゆかむるぞいへど。
翁まで。おちかゝり。あやしまるるふけぬくいつくへとも。いふにや。様
たらざるやうもある。いかゞよせむまじば。翁あゆくにかくしら
をとらげて。申すに。はなてたてもるをば。へだせめてとらせ
行くへ。バ。告をまつに。又は供に具し行く。御太刀持てる

者ぞ。しだくさをもてる男あらはこの番人にハ。やへとらせはす
あしたをろあくあるけまじと。合点いくにてまじ盗す人べおもの。
小屋にあらざるところゆゑ。たぶん。ふくせはとられ。かすびかる事
あらバ。厩に中さむずるぞよ。いへぞ太刀をもちかさをもちと二人
つれ。地にうちはさまくおのぢさるまいと仕らじ。はぶかるも
かくて侍るんぞいひなるうちある。でたゝしとハとのつれ
あるがぞしりんける人のかるをはなくけるところ
菜乃入道とらふ人あるま。人のをとるを柳乃おもし枝を
をしひて。おまし庭にさして。おもしまでたやとてつらひける
なら何につけたくをく垣乃あるらにさつせつきてみがくれど
入こさておもて拝するよく見あまりてあまじといひつあぬる。

ともハそのおもむきすのかたに札をそいでてありしつゝ柳
陰をわたらし七日ばかりもずして入道庭よおもむきて
は柳などもやめおかれしにおそひつる際さとせけるし
ろわとはそらで陰をもけるかなあわらてわらハをかめ
けるまで居るまでも妻の戸に子どもも入来くなお求めむに
急ぎわてとがめむやうもあらじをかしまくも妻入さいざわ
けるよしいへバつらハ志ろわろに社をおあらせてさらで侍わ。
妻の戸にぬきしとし社をかはもわけるらいましとおもハ行
へく例も神業を絶めましハなおめ絶て餌にをときめ
て夜明くるく後ぞさし侍わけるとて子入道もあきれて大
くちおもろげ。きられむおもしくさらハれなわきの。

おすゞつハかすご入道のことぶかく余つゆもさつでちくれなとよ
あらけるよ絶ずずつて心すめぶたずわ忘れバ妻ハなきを
志きまてふしなるるハ人のおもひでもなでうずなりにあ
すかい絶つおけまバ父おそろく志わきて入るもしつりと
だりしおいろふもよりそて称るふうをよいを養をし入る。
あるむしさちく起出くやらうごくぞのなるもして居る
ふえ祢うしなむめべの妙きそあらけるなつハそつまの
くでこさ所もののさらいるをえぼうしなふなまにおもすぢ。
かねもく侍らといけるふあ船ろとそしやれ。
丹後国にまつ寄ある男ありけるが魂が子男をもつく
こよろて銭もいゐで龍家の月くとむよて法の浜ばら子

出てさぶらひある紙なる龍のふくろを紙にておきや給ふ
のあかいらとて甲乃うへふれるがさくふらおくて
うち取男なりけるバかめを打ちれて刻げ死なる
しおかうまを紙さまどまうまずかふうを藤ふ出なるをさ
しあらさまふあるをあてやうなる女いでさくわれを
誘言のはらいれるいざさそうへいばうまをくていな
して沙方しまなしかやあるとへば女を龍ちら
大事かあるとて沖乃うへ紙さしてあゆしをおろえう
とて変ずてのるとてりはわさて龍宮ふいるちうへ誘男乃
御前ふまの乃るとてをまをいうおふたるものみく作りみ
くこふまするむでれるとも変をく対おしてまの

顔をむけるにあたりが乳のあたりにかくせし珠玉なりしとおもひ
さむさいはんかたなしにもあら涙待つもしれがしさらばくたびれあらし地
さいとも七たりべくこゝかしこいへどもし龍王まらむこともあらへて
のこおハようすこゝかしこにたやすかりまでめづらしかたるより
けづりまちまぬるまじバなさるにしよおもひてたてゝこゝろえらり
あるべしまむねさそてめのまへなれすぐるとよろこびておと姫
こゝろにハよいへバあのおぼろ皆地にありやこゝにて、みおちたさせ
おりぬよらふかまじハむさいよおかの母のもとてこゝろ玉を、
さそてたらいれしなりしおもひをるしやきてあゆきてそとの
らふおまぶ門のあるまかくもあるらよきのあてゝいはふ
けるハよめしのきつもちとるまで、おとひめ君のこゝろをすゝめ小

するわざとりふ華をつとりてさハまれをを猿とおそれしひきまづ
へ渡るなめりもよそ縁ふおそろしくていふおりしてふかそ
出れなしまきものゝバあ猿玉乃綱よふらのぬなすらく
よわるもいかにしておもひゐす神の妻たのみ入くかうう
あしく玉のたえぬめすといふし竹よそつい築ちをとほくく
いであるがことゝるまうくべきおひたちて、かつおするまでバ
よくまへしそのまたれバ浪の舵をけりてやうやくそとの濱
通りまかへりまゐるもあるからの肴どもをそて、いそでかへり舵
手に人へかへ人まこさあバかのをつなに綱つなまとハいひ待達
少し七日まで入へまたハされバ居すゝらぬ幸と口まもぐ
ゆ地ゆづ手まにもち行へ家きのまでふたゝびとゝふ出達

誘ふてよりて
うりよいくばさぐ
ぬぐやれをんをいれいと
そんじうもし所
あるものにはうとふさの男箱をあまてこびれ
ていて初て知て人くふもをぐやせてん
やく屋作きばうせずハ服くるめおうん
よてむをびる級知てさハ知らくぐとてあるまきハ
いさうの知わぐたるえず わろくぬもらぐきてあるもの
なるもどわてこれハふるおもろ知らあーぐたびうう
れるぬどのやぐきはもろびるぐこてらいきくあつたわ

人くさてくもつ知くあぐくれどろおてあ知るに紙
ふさぐもんも知ーおろ乃男の化もうぬふと おりひつある
をもやう物の志ろをふくぐるがぐーをわるもの
うくのものどもをいれたるふこものうやくせんハ知ま
ふもふて知。

志ゝのすみゝ物語下終

此書五老石川子所著也嘗
左東都時借鈔其家須日書
肆東壁堂乞上梓ゝ乃校正
以與ゝ
甲子孟春　尾張　朝田保清識

5年1月

乙丑春開彫

坂唐物町
河内屋太助

戸山下町
萬屋太次右衛門

府玉屋町
永樂屋東四郎梓

文化第二乙丑春開彫

書肆

大坂唐物町 河内屋太助

江戸山下町 萬屋太次右衛門

尾府玉屋町 永樂屋東四郎梓